



公共場面における迷惑行為に対する罪悪感：共感性，公的自己意識，私的自己意識との関連から

谷，芳恵

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(2):21-26

(Issue Date)

2010-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81002093>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002093>



公共場面における迷惑行為に対する罪悪感 —共感性, 公的自己意識, 私的自己意識との関連から—

The Relationship among Guilt Feeling to Annoyance in Public Space, Empathy, and Public/Private Self-consciousness

谷 芳 恵*

Yoshie TANI*

要約: 罪悪感とは、問題行動の発生や抑制に関わる情動的反応の一つであると考えられる。罪悪感の喚起には、共感性、公的自己意識、私的自己意識といった内的要因が関連することが指摘されている。本研究では、公共場面における迷惑行為に対して喚起される罪悪感について、共感性、公的自己意識、私的自己意識がどのように関連しているかを検討した。大学生・大学院生 341 名(男性 145 名, 女性 196 名)に質問紙調査を行い、男女別に罪悪感と共感性(「共感的関心」「個人的苦痛」「ファンタジー」「気持ちの想像」)、公的自己意識、私的自己意識との相関を求めた。その結果、男性では全ての共感性尺度との間で有意な正の相関が、女性では共感的関心とファンタジーでのみ有意な正の相関がえられたが、いずれも弱いものであった。公的自己意識、私的自己意識とは、男女ともに有意な相関はみとめられなかった。「ウチ」「ソト」の対人関係と他者配慮の関連、自己中心性に焦点をあて、考察を行った。

Key Word: Annoyance in Public Space, Guilt Feeling, Empathy, Public/Private Self-consciousness

問題と目的

電車内での携帯電話の使用や、優先座席の占有といった公共場面における迷惑行為が問題にされるようになって久しいが、一向に問題が解消される気配はない。それどころか、もはや当たり前になりつつある。迷惑行為を抑制することは、無用な軋轢をなくし、快適な社会生活を送る上で重要な課題である。

迷惑行為に対する罪悪感 石川・内山(2002)は、社会場面での青年の反社会的行動の増加の一因として罪悪感が適切に喚起していないことをあげている。罪悪感とは、後悔、良心の呵責、“悪いことをしてしまった”ことへの失望を意味する(Tangney, 1995)自己意識的情動である。実際に規範に背かずとも、それを欲するだけでも喚起されるとする見方もある(e.g. 横田, 1999)。罪悪感とは社会的行動を制御し、謝罪や補償行為を生じさせる、規範準拠機能および個人と対人間に役立つ機能をもつ(有光, 2001a)。その一方で、罪悪感とは抑うつ・不安、対人不安、社会的活動障害と負の相関をもつ(有光, 2001a; 有光・今田, 1999)、苦痛を伴う情動反応であるでもある。そのため、その苦痛を回避するために罪悪感を喚起するような行為は抑制されることが考えられる。このことから、問題行動の発生、抑制の過程を検討する上で欠かすことのできない重要な要因であるとい

え、罪悪感を喚起させることが諸々の社会的問題を解消するために必要である。

しかし、本研究でとりあげる公共場面における迷惑行為は、法律や規則ではなく、慣習的なマナーに属するものである。そのため一般的に各自の良識に任されるものであり、罪悪感が喚起されにくい行為であると考えられる。そこで本研究では、公共場面での迷惑行為に対する罪悪感をとりあげ、その喚起に関わる要因について検討する。

罪悪感喚起に関わる要因を検討する前に、まず本研究での罪悪感の位置づけについて明確にする必要があるだろう。大西(2008)は、従来の罪悪感測定尺度について検討し、罪悪感の諸側面の整理を行っている。それによると罪悪感とは、一時的感情状態として喚起された罪悪感の強度を表す状態罪悪感、罪悪感を経験することに関するパーソナリティ特性である特性罪悪感、ある特定の状況に対する判断傾向を表す罪悪感に分類される。本研究で扱う罪悪感とは公共場面での迷惑行為をする状況で喚起される罪悪感であり、3つ目の特定の状況に対する判断傾向を表す罪悪感に該当するものである。

罪悪感と共感性 罪悪感喚起に関わる要因として第一に共感性をとりあげる。共感性とは、他者の内的状態(認知、感情)を想像、理解、共有することに関わる社会的スキルの概念である(Davis, 1994 菊池

* 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程

(2009年9月1日 受付)
 (2010年1月12日 受理)

訳, 1999)。他者の理解を深め, 円滑な対人関係形成の基礎となる(相川, 1999)内的要因である。共感とは他者の体験する感情と同じ, あるいはそれに対応した情動的反応が生じることをいうが, 他者への思いやりや理解といった意味をも含む概念である。

共感性については, これまで多くの測定尺度が作成されている(e.g. 明田, 1999; Davis, 1983; 加藤・高木, 1980; 登張, 2000, 2003)。これらの尺度についてほぼ共通してみられる共感性の特徴は, 共感性は複数の要素からなる多次元的概念であるという捉え方である。これまでに作成された多次元尺度においては, 共感性の他者志向的・認知的側面である「視点取得」, 他者志向的・情動的側面である「共感的関心」, 自己中心的な情動的側面である「個人的苦痛」, 架空の他者への感情移入である「ファンタジー」の要素が見出されている。共感性の高い人は, 他者の立場に立って共感的に関わり, 他者の心を慮り, 他者の苦痛を取り除こうとする傾向をもつ。そのため援助行動や社会的行動を生じさせることが知られているが, 同様に共感性は, 迷惑行為や違反の抑制に関わる要因であるとする見方も広く受け入れられている(e.g. 薩日内, 2001)。

Hoffman(1998)は, 罪悪感とは他者への配慮と他者視点から違反行為を捉えるという両側面が機能して喚起すると指摘している。このため, 罪悪感と共感性の関係については多くの研究がなされ, 正の相関関係を持つことが示されている(e.g. 有光, 2002; 石川・内山, 2001, 2002; 藤吉・田中, 2006)。しかし, 認知的共感性要因である役割取得能力と情動的共感性とでは, それが対人場面であるか規則場面であるかによって罪悪感との関連が異なることも指摘されている(石川・内山, 2002)。このことから, 罪悪感と共感性の関連について検討する際には, 罪悪感が喚起される状況と共感性の多次元性を考慮する必要があるといえる。

罪悪感と自己意識 次に, 罪悪感喚起に関わる要因として自己意識特性をとりあげる。他者に見つめられたり鏡に映る自分を見たりするとき, 私たちは自分自身に対して注意を向けやすくなる。自己意識特性とは, このような自己への注意の向かいやすさに関する個人的特性である(Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975)。自己への注意の高まりは, 自己や他者が望ましいとする理想的な自己と現実の自己の比較を生じさせると考えられる。即ち, 自己に注意が向かうことで社会的に望ましくない行動をする自己の姿に対する気づきが促進され, 罪悪感が喚起されやすくなることが予想される。

自己意識特性は, 公的自己意識特性と私的自己意識特性とに分類される(e.g. Fenigstein et al, 1975; 押見, 1992)。公的自己意識とは, 他人からみられている自分, 自分の外面的, 対人的な側面を意識しやすい傾向である。また私的自己意識とは, 自分の感情, 態度, 考えていることなど, 他人には直接知ることのできない, 内面的, 私的な側面を意識しやすい傾向である。これらは弱い正の相関関係にあるが, それぞれ独自の行動効果をもつことが知られている(押見, 1990; 1992)。例えば, 公的自己意識の高い人は社会的基準を重視する傾向にあるのに対し, 私的自己意識の高い人は個人的基準を重視する傾向があることが指摘されている(Fenigstein, 1979)。

このような傾向の違いから, 迷惑行為や違反行為を行ったときに喚起される情動的反応が公的自己意識と私的自己意識の高低によって異なることが予想される。即ち, 公的自己意識の高い人は他者がそんな自分をどのように評価するかにより関心を持つのに対し, 私

的自己意識の高い人は基準から逸脱した自分とその行動そのものにより関心を持つと考えられる。これは, 公的自己意識よりも私的自己意識が高いほど自らの違反に対してより罪悪感を喚起しやすいことを示唆している。しかし, 自己意識的情動である罪悪感と自己意識との関連を検討した研究では, 公的自己意識と私的自己意識のいずれも罪悪感と正の相関を持つことが示されている(e.g. 有光, 2001b, 2002, 2006; 有光・今田, 1999)。本研究では, それぞれの自己意識による違いも含め, 迷惑行為に対する罪悪感の喚起に自己意識が与える影響について検討する。

公共場面の特徴 以上のように, 罪悪感と共感性, 公的自己意識, 私的自己意識との関連についてはすでに多くの先行研究において指摘されている。しかし, これらの研究の多くは対人場面や規則場面における罪悪感を扱ったものであり, 公共場面でのマナー違反といった慣習的で見知らぬ他者との間で問題になる迷惑行為について検討したものはあまりみられない。公共場面は, 多くの見知らぬ人と共有するという点で, その他の生活場面とは大きく異なる。かつての社会は, 周りの人々の多くが顔見知りであり, このような社会においては, 世間に準拠して恥ずかしくない行為をとることが社会規範の基本であった(井上, 1977)。しかし現在の社会においては, 見知らぬ他者と接触する機会は著しく増加している。公共場面で遭遇する多くの見知らぬ他者は, その後深く関わることはないため, その場での軋轢が後々の生活に何らかの影響を及ぼすことはないのである。このように公共場面における他者との関係性は, 家族や友人, 顔見知りといった特定の個人と相対する対人場面における関係性とは異なる性質をもつといえる。本研究では公共場面で迷惑行為を行った際に喚起される罪悪感と, 共感性, 公的自己意識, 私的自己意識の関連について検討することで, これまでの知見と同じ結果がえられるか, または異なる関連を持つのかを検証する。

なお本研究では, 公共場面のうち, 特に電車の乗車場面における迷惑行為をとりあげる。これは, 多様な年代, 性別の人々が日常的に利用する公的機関であり, 多くの場合周囲にいる人のほとんどが見知らぬ人であること, 街角などに比べて流動性が低く, 一定時間その空間に閉じ込められるために回避がしにくいこと, 映画館やレストランなどに比べて狭く, 顔を見ることができず距離で他者と対峙することなどから, 迷惑行為が生じやすい場面であるためである。**男女差の検討** また今回とりあげる罪悪感, 共感性, 公的自己意識, 私的自己意識は, いずれも男女差がみられることが示されている(e.g. 菅原, 1984; 押見・渡辺・石川, 1986; 池田・押見, 1999; 石川・内山, 2002; 明田, 1999)。また石川・内山(2002)では, 男子青年と女子青年とでは情動的・認知的共感性と罪悪感との関連の違いがあることが示されている。発達心理学や人格心理学では, 男性が「個の確立」を重視するのに対し, 女性は「関係性の維持」を重視するという, 方向性の違いがあることが指摘されている。例えばGilligan(1982)は, 男性と女性の道徳性は質的に異なっており, 男性の道徳性が分離志向の強い「正義の道徳」であるのに対し, 女性の道徳性は関係性志向の強い「配慮と責任の道徳」であるとしている。また伊藤(1993, 1998)は, 男性は個人志向性優位であり, 女性は社会志向性優位であるとしている。これらの指摘から, 罪悪感喚起において男性では自己の規範意識, 即ち私的自己意識が, 女性では周囲との協調, 即ち共感性がより強い影響力を持つことが予想さ

れる。このことから、本研究では男女別に分析を実施し、罪悪感喚起と共感性、自己意識の関連の違いについても検討することとする。

方法

1. 調査対象者

京阪神圏に住む大学生・大学院生を対象に無記名の質問紙調査を行い、回答に不備のない18～24歳の341名(平均年齢19.62歳, SD=1.51)を分析対象とした。男性145名(18～24歳, 平均年齢19.93歳, SD=1.59), 女性196名(18～24歳, 平均年齢19.39歳, SD=1.40)である。調査は、大学の講義開始前あるいは終了後に質問紙を配布し、集団的に実施、回収が行われた。その他、知人を介して、個別に質問紙を配布、回収を行った。調査実施時期は2005年11月～2006年10月である。

2. 実施内容

罪悪感 乗車場面における15の非社会的行為(Table 1参照)をとりあげ、それらの行為を自分が行った場合、どの程度後ろめたいと感じるかをたずねた。「1:全く感じない」～「6:とても感じる」の6段階で回答するよう求めた。

共感性 登張(2003)の多次元共感性質問紙をもちいた。この尺度は、「共感的関心」(他者の状況や感情体験に対して自分も同じように感じ、他者志向の暖かい気持ちをもつ傾向)13項目、「個人的苦痛」(他者の苦痛に対して、自分が不安になってしまい、他者の状況に対応した行動をとることができない傾向)6項目、「ファンタジー」(小説や映画などに登場する架空の他者に感情移入する傾向)6項目、認知的側面にあたる「気持ちの想像」(他者の気持ちや状況を想像する傾向)5項目の、4つの下位尺度からなる。「1:全くあてはまらない」～「5:非常にあてはまる」の5段階で回答するよう求めた。

自己意識 菅原(1984)の自己意識尺度(21項目)を用いた。この尺度は、「公的自意識」(自己の外的、対人的側面に注意を向ける程度)11項目、「私的自意識」(自分の内面に注意を向ける程度)10項目の、2つの下位尺度からなる。「1:全くあてはまらない」～「7:非常にあてはまる」の7段階で回答するよう求めた。

結果

1. 各変数の得点の算出

罪悪感 因子構造を確認するために固有値を1に設定し、主成分分析を行ったところ、第一主成分から第二主成分にかけて固有値の大幅な落ちこみがみられた。このことから、罪悪感は一因子構造と捉えるのが妥当と判断された。因子数を1に設定し、主成分分析を行った結果をTable1に示す。次に、信頼性を確認するためにCronbackの α 係数を算出した。その結果 $\alpha = .86$ であり、十分な内的整合性が認められた。

共感性 因子構造を確認するため、因子分析(主因子法, promax回転)を行った結果、登張(2003)と同様の4因子が抽出された(第1因子「共感的関心」、第2因子「ファンタジー」、第3因子「気持ちの想像」、第4因子「個人的苦痛」)。各因子についてCronbackの α 係数を求めたところ、それぞれ共感的関心 $\alpha = .87$ 、個人的苦痛 $\alpha = .69$ 、ファンタジー $\alpha = .82$ 、気持ちの想像 $\alpha = .74$ であった。個人的苦痛がやや低い値であったが、分析には十分耐えうると判断された。

自己意識 因子構造を確認するため、因子分析(主因子法, promax回転)を行った結果、菅原(1984)と同様の2因子(第1因子「公的自意識」、第2因子「私的自意識」)が抽出された。Cronbackの α 係数はそれぞれ公的自意識 $\alpha = .89$ 、私的自意識 $\alpha = .86$ であり、十分な内的整合性が認められた。

以上、罪悪感、共感性、自己意識の下位尺度それぞれについて項目平均値を求めて各得点とし、分析を行った。

2. 各変数の得点と男女差の検討

男女別にみた各変数の得点の平均・SDをTable2に示した。各変数について男女差の検討(t検定)を行った結果、共感的関心、個人的苦痛、気持ちの想像、私的自意識、罪悪感で有意な差が、公的自意識で有意な傾向がみられた。いずれも男性より女性で得点が有意に高かった。

3. 罪悪感と共感性、自己意識の関連

男女別に各変数間の相関を求め、その結果をTable3に示した。

Table1 非社会的行動に対する罪悪感の主成分分析結果

	F1	h ²
9 電車内で、声の大きさを気にせずおしゃべりをする	.71	.50
8 座席に荷物を置いたり、足を広げて座ったりする	.69	.48
10 電車に乗ったり降りたりする人がいるのに、入り口付近にいて動かない	.69	.47
6 大きな荷物を置いて通路をふさぐ	.65	.43
2 まだ降りる人がいるのに、先に乗り込もうとする	.61	.37
15 乗車時に、列に並ばずに割り込む	.60	.37
12 電車内や駅のホームにごみを放置する	.60	.36
13 電車内でヘッドホンステレオの音漏れを気にせず音楽を聞く	.59	.34
14 電車内で、携帯電話で通話する	.58	.33
5 混雑した電車で、空席の前に立ったままている	.55	.30
7 電車内で物を食べたり飲んだりする	.54	.29
4 電車内で、携帯電話をマナーモードにしない	.53	.28
3 かけ込み乗車をする	.53	.28
11 リュックを背負ったまま満員電車に乗る	.50	.25
1 電車に不正乗車(無賃乗車, キセル)する	.43	.19
	寄与率	34.92

※数字は項目の提示順

まず共感性では、男性では共感的関心はファンタジー、気持ちの想像と、ファンタジーは気持ちの想像との間に有意な正の相関がみられた。女性では、共感的関心はファンタジー、気持ちの想像と、個人的苦痛はファンタジーと、ファンタジーは気持ちの想像と有意な正の相関がみられた。自己意識では、男女とも公的自己意識と私的自己意識に有意な正の相関がみられた。

共感性と自己意識の関連については、男性では共感的関心はファンタジー、気持ちの想像と私的自己意識との間に有意な正の相関がみられた。女性では、共感的関心、ファンタジーと公的自己意識との間に、共感的関心、ファンタジー、気持ちの想像と私的自己意識との間に有意な正の相関がみられた、また個人的苦痛は私的自己意識と有意な負の相関がみられた。

次に、罪悪感と共感性、自己意識の関連については、男性では全ての共感性尺度で有意な正の相関がみられた。一方女性では、共感的関心とファンタジーとの間でのみ有意な正の相関がみられた。公的自己意識、私的自己意識については、男女とも罪悪感と有意な相関はみられなかった。

考察

1. 迷惑行為に対する罪悪感と共感性、自己意識の男女差

はじめに、罪悪感と共感性、自己意識の男女差について分析を行った。その結果、女性は他者の感情体験に対して他者志向的な感情的反応を持ちやすい一方で、他者の苦痛に対しては自分中心の感情反応を持ちやすく、他者の立場に立って他者の気持ちを想像しようとする傾向が高かった。また女性は男性より思考や態度といった自己の内的側面と他者から見られる自己の外的側面の双方に対して意識を向けやすく、公共場面における迷惑行為に対して後ろめたさを感じやすかった。

先行研究においても男性よりも女性の方が公的、自己意識が高く、罪悪感を喚起しやすいことが示されており、今回の結果はそれに一致するものである。共感性においても同様に女性でより高いという結果が示されている(明田, 1999)。共感性のうち、ファンタジーでのみ男性と女性に差はみられなかったが、これは他の3因子と異なり、ファンタジーが実在の他者でなく物語などの架空の他者に対する感情移入を測定するものであるためと考えられる。

2. 共感性と自己意識の関連

まず共感性の下位因子間の関連では、個人的苦痛とファンタジーの関連に男女で違いがみられたのを除き、男女でほぼ同様の関連がみられた。登張(2003)による共感性下位尺度間の相関の検討では、

男子大学生では個人的苦痛を除く全ての尺度間で有意な相関が得られ、女子大学生では個人的苦痛・気持ちの想像の間で無相関であった以外は有意な相関が得られている。今回の結果は、これにほぼ一致した結果といえるだろう。個人的苦痛は、他者の苦痛などに対して、他者ではなく自己に焦点が向けられる(動揺、混乱、どうしていいかわからない等)自己中心的な共感性であり、その他の他者志向的な3因子とは性質が異なるために有意な相関が得られなかったと考えられる。

公的自己意識と私的自己意識では、男女ともに正の相関が得られた。公的自己意識と私的自己意識については、これまで一貫して小～中程度の正の相関がみられており(e.g. 池田・押見, 1999; 菅原, 1984; 押見・渡辺・石川, 1986)、本研究の結果もこれに一致する。私的自己意識と共感性については、先行研究でも正の相関が報告されている(e.g. 中江・古賀・平田・山口・坂井・押見, 1999)。また角田(1994)は、共感性類型と自己意識との関連を検討し、感情の共有経験の高い群は私的自己意識が有意に高いという結果をみだしている。この結果から他者の感情を共有し意識するためには、それを感じる自己の感情状態についての認知も必要であると指摘しており、今回の結果はそれを一部支持するものであるといえる。一方個人的苦痛では男性で無相関、女性で負の弱い相関が得られた。これは、私的自己意識の高い人は自己の内面に意識を向けやすく、自らの感情状態を他者の感情に巻き込まれることなく正確に把握することができたためと考えられる。

公的自己意識と共感性の関連については、男性では全ての共感性において有意な相関は得られず、女性では共感的関心、ファンタジーとのみ弱い正の相関が得られるにとどまった。中江他(1999)は、公的自己意識は共感性の視点移入因子との間に負の有意な相関があること、視点共存因子とは無相関であることを見出している。この結果から、公的自己意識の高い人が持つ他者への関心は自己中心的であり、彼らにとって他者が他者自身を見つめることはさほど重要な

Table2 男女別にみた各変数の平均・SD と t 検定の結果

	男性 (n=145)		女性 (n=196)		t
	平均	SD	平均	SD	
共感的関心	3.70	.57	3.86	.51	-2.81 **
個人的苦痛	2.84	.64	3.05	.58	-3.27 **
ファンタジー	2.98	.84	3.07	.81	-1.03
気持ちの想像	3.15	.71	3.31	.65	-2.12 *
公的自己意識	5.16	.85	5.31	.74	-1.69 †
私的自己意識	4.85	.95	5.05	.79	-2.09 *
罪悪感	4.62	.76	4.83	.60	-2.79 **

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

Table3 男女別にみた共感性、自己意識と罪悪感の各尺度間相関

	共感的関心	個人的苦痛	ファンタジー	気持ちの想像	公的自己意識	私的自己意識	罪悪感
共感的関心		.03	.37 ***	.36 ***	.08	.21 *	.30 ***
個人的苦痛	.04		.12	-.05	.11	-.10	.19 *
ファンタジー	.45 ***	.15 *		.26 **	.10	.31 ***	.19 *
気持ちの想像	.46 ***	-.02	.31 ***		.13	.48 ***	.28 **
公的自己意識	.18 *	.10	.20 **	.03		.18 *	-.09
私的自己意識	.28 ***	-.17 *	.25 **	.50 ***	.34 ***		.15
罪悪感	.25 ***	-.02	.16 *	.10	.02	.03	

右上: 男性 左下: 女性 *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

ことではないのだろうと指摘している。今回の結果は、この指摘に一部一致するものである。女性でのみ一部有意な正の相関がみられたことについては、他者との関係性を志向する女性においては、他者への関心の高さや架空の物事に自己を移入する傾向が公的な存在としての自己の有様に直接関わるのかもしれない。この点については、今後更なる検討が必要であろう。

3. 罪悪感と共感性の関連

罪悪感と共感性の関連では、男女で異なる関連が見られた。まず、男女ともに、他者の感情体験に対して自分も同じように感じとったり、架空の他者に感情移入したりする傾向が高いほど、罪悪感を喚起しやすい傾向がみられた。さらに男性では、他者の苦痛や感情状態に巻き込まれやすいほど、また他者の視点に立ってその気持ちや状況を想像しようとする傾向が高いほど罪悪感を喚起しやすかった。また、いずれも男性の方が相関係数は大きく、これらの結果は罪悪感と共感性の関連は男性よりも女性でより強いという予測に反するものである。女性は「関係性の維持」を重視する傾向があると先述したが、公共場面で出会う一般的他者は関係性を維持すべき対象である身近な他者ではないため、このような結果が得られたと考えられる。

今回とりあげた公共場面における迷惑行為は、主に見ず知らずの一般的他者との間で問題になる行為であり、これまで検討されてきた対人場面での罪悪感や明確な規則を破ることによる罪悪感とは性質を異にしているといえる。共感性について澤田(1992)は、日本社会では家族、友人などの「うち」の人間に対しては容易に共感することができるが、見知らぬ他者である「ソト」の人間に対しては共感することが困難であるとしている。電車に乗りあわせた他者は「ソト」の人間であり、その気持ちに配慮するべき対象であるとは認識されにくかったために弱い相関にとどまったことが考えられる。本研究と同様、共感性と罪悪感の関連を検討した藤吉・田中(2006)においても、公衆道徳違反行為に対する罪悪感と共感性の相関は弱いものであり、マナー違反等の行為については他者の立場に立つことで罪悪感を喚起することが難しいことが示唆される。

しかし、同じ公共場面であっても、友人や家族などの身近な他者が周囲にいるような集団場面では別の影響が推測される。集団場面では関係性の維持が課題となるため、周囲の他者の快・不快といった内的状態に対する関心が高まると考えられる。さらに身近な他者の不快は関係性の維持に支障をきたすため、迷惑行為はより回避されるべきものと認識されるだろう。このため、集団場面ではより罪悪感と共感性が強く関連するかもしれない。単独場面と集団場面での迷惑行為に対する罪悪感の喚起の違いの検討は、今後の課題である。

4. 罪悪感と自己意識の関連

次に公的自己意識、私的自己意識はともに罪悪感に有意な関連は示されなかった。有光(2001b)は罪悪感と諸性格特性との関連を検討し、公的自己意識、私的自己意識は罪悪感と有意な正の相関を持つことを示しているが、本研究の結果はそれに一致するものではなかった。

公的自己意識の高い人は、先述したように、自己中心的な性質を持つことが指摘されている(e.g. 中江他, 1999; 押見・坂井, 2002)。押見・坂井(2002)は、被験者に自分の額に“E”の文字を描かせ、

外部観察者からEと見えるように描くか、自分から見てEと見える(外部観察者からは左右が逆転して見える)ように描くかを検証する実験を行っている。その結果、公的自己意識の高い人は低い人よりも自分から見てEと見えるように文字を描く傾向があった。このことから押見・坂井(2002)は、公的自己意識の高い人は自己中心的反応をより強く現わす傾向があるとしている。この研究では評価懸念による違いはみられなかったが、評価懸念が低い場面では非自己中心的反応を、高い場面では自己中心的反応を示す可能性を指摘している。このことから、対人場面といった評価懸念を引き起こしやすい場面に対して、本研究で用いたような公共場面は評価懸念を引き起こしにくいいため、罪悪感と公的自己意識との関連がみられなかったことが考えられる。

私的自己意識と罪悪感に有意な相関を見出した有光(2001)は、私的自己意識が高い人は自己内省しやすく自分についてのより明瞭な知識を持つため、自分の行動の失敗に注意が向かいやすく、罪悪感を経験しやすいと考察している。本研究で用いたのは主にマナー違反に属する迷惑行為であり、その行為をすることによって失敗したとは感じられにくいかもしれない。そのため今回私的自己意識と罪悪感に有意な相関がみられなかったことが考えられる。

まとめ

本研究では、公共場面における迷惑行為を行った際に生じる罪悪感に、共感性と自己意識がどのように関係しているかを検討した。その結果、共感性が高いほど罪悪感を喚起しやすいという結果が得られた。またこれらの関連には男性と女性で違いがみられ、迷惑行為に対する情動的反応を検討する際には男女による違いを考慮する必要があることが示唆された。

罪悪感と共感性、自己意識の相関係数はいずれも男性よりも女性の方が低いにも関わらず、喚起された罪悪感は女性でより高かった。これは共感性、自己意識よりも罪悪感の喚起に影響する要因の存在を示唆している。また、今回罪悪感と自己意識に有意な関連が見られなかったことから、公共場面での迷惑行為は失敗という認識を生みにくいことが考えられた。これは、公共場面は自己への注意が向かいにくい場であるためであるとも考えられ、状況による自己覚知の程度などにも注目する必要があるといえる。以上のことから、特性罪悪感といった共感性・自己意識以外の内的要因や状況要因との関連についても検討することが今後の課題としてあげられる。

今回は、乗車場面での単独の迷惑行為について検討を行ったが、先述したように集団場面では異なる関連が見られることが予測される。社会行動について検討する際には、その状況・場面の影響を無視することはできない。しかし、単独・集団という要素だけでなく、集団規模やその流動性、優勢となる規範など、公共場面は様々な要因が複雑に絡み合った場であり、その複雑さが迷惑行為の抑制を検討する上でも障壁となっている。食事を目的とするレストランや流動性の高い街角などで生じる迷惑行為では、乗車場面での迷惑行為についてえられたものとは異なる関連がえられるかもしれない。喚起された罪悪感が迷惑行為を抑制する上で果たす効果について検討を行い、迷惑行為発生とその抑制の過程を解明することが最終的な課題ではあるが、そのためにはまず公共場面という場を捉える概念

の整理・分類が急務である。

引用文献

- 相川 充 (1999). 共感性 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司(編) 心理学辞典 有斐閣 p.183
- 明田芳久 (1999). 共感の枠組みと測度: Davis の共感組織モデルと多次元共感性尺度 (IRI-J) の予備的検討 上智大学心理学年報, **23**, 19-31.
- 有光興記・今田 寛 (1999). 特性罪悪感尺度作成の試み 日本教育心理学会総会発表論文集, **41**, 250.
- 有光興記 (2001a). 罪悪感, 恥と精神的健康との関係 健康心理学研究, **14**, 24-31.
- 有光興記 (2001b). 罪悪感, 羞恥心と性格特性の関係 性格心理学研究, **9**, 71-86.
- 有光興記 (2002). 日本人青年の罪悪感喚起状況の構造 心理学研究, **73**, 148-156.
- 有光興記 (2006). 罪悪感, 羞恥心と共感性の関係 心理学研究, **77**, 97-104.
- Davis, M.H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. Boulder, CO: Westview Press. (菊池章夫(訳) (1999). 共感の社会心理学—人間関係の基礎 川島書店)
- Davis, M. H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
- Fenigstein, A. (1979). Self-Consciousness, Self-Attention, and Social Interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 75-86.
- Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A.H. (1975). Public and Private Self-Consciousness: Assessment and Theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- 藤吉貴子・田中奈緒子 (2006). 青年と成人における共感性と罪悪感の差異 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **9**, 99-105.
- Gilligan, C. (1982). *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's development*. Harvard University Press. (ギリガン, C. 生田久美子・並木美智子(共訳) (1986). もうひとつの声: 男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店)
- Hoffman (1998). Empathy, role-taking, guilt, and development of altruistic motives. In T. Lickona (Ed.), *Moral development and behavior* (pp.124-143). New York: Holt.
- 池田善英・押見輝男 (1999). 自己意識尺度オリジナル版の評価 立教大学心理学科研究年報, **41**, 51-61.
- 井上忠司 (1977). 「世間体」の構造—社会心理史への試み 日本放送出版協会
- 石川隆行・内山伊知郎 (2001). 5歳児の罪悪感に共感性と役割取得能力が及ぼす影響について 教育心理学研究, **49**, 60-68.
- 石川隆之・内山伊知郎 (2002). 青年期の罪悪感と共感性および役割取得能力の関連 発達心理学研究, **13**, 12-19.
- 伊藤美奈子 (1993). 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **64**, 115-122.
- 伊藤美奈子 (1998). 人間の発達をとらえる際の2志向性概念の提唱 心理学評論, **41**, 15-29.
- 角田 豊 (1994). 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究, **42**, 193-200.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, **2**, 33-42.
- 中江須美子・古賀ひろみ・平田万里子・山口一美・坂井 剛・押見輝男 (1999). パースペクティブ・テイキングと自己-Davis のパースペクティブ・テイキング尺度における検討 立教大学心理学研究, **42**, 57-67.
- 大西将史 (2008). 青年期における特性罪悪感の構造—罪悪感の概念整理と精神分析理論に依拠した新たな特性罪悪感尺度の作成 パーソナリティ研究, **16**, 171-184.
- 押見輝男 (1990). “自己の姿への注目”の段階 中村陽吉(編) “自己過程”の社会心理学 東京大学出版会
- 押見輝男 (1992). 自分を見つめる自分—自己フォーカスの社会心理学—サイエンス社
- 押見輝男・坂井 剛 (2002). 公的自意識の自己中心性について—一類にEを描く— 立教心理学研究, **44**, 13-19.
- 押見輝男・渡辺波二・石川直弘 (1986). 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報, **28**, 1-13.
- 薩日内信一 (2001). 個性を生かすマナー・殺すマナー 特集・マナーを知らない子・教えない親 児童心理, **756**, 1218-1222.
- 澤田瑞也 (1992). 共感の心理学—そのメカニズムと発達— 世界思想社
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- Tangney, J. P. (1995). Shame and guilt in interpersonal relationships. In J. P. Tangney & K. W. Fisher (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. Pp.114-139.
- 登張真稲 (2000). 多次元的視点に基づく共感性研究の展望 性格心理学研究, **9**, 36-51.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元的視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.
- 横田正夫 (1999). 罪悪感 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司(編) 心理学辞典 有斐閣 p.287

謝辞

本論文は2006年度神戸大学大学院総合人間科学研究科に提出された修士論文の一部を再分析したものです。ご指導いただいた齊藤誠一准教授、並びに調査にご協力いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。